



ワルシャワ
旧市街にて筆者

ポーランド自転車一人旅

～国境を越えて～

鳴神 雅史

3. 自転車での陸路国境越え(連載第1回より)

国境の街、オーデルに着いた。巨大な教会から大きな鐘の音が響くとても小さな街だ。一刻も早く自転車での国境越えを体験してみたくて、すぐに国境の川へ向かった。河川敷が遊歩道になっており、200mほど先のポーランド領が手に取るように見える。「おお！川の向こうは外国だ！」(こういった素朴だけど強い印象が読んで、自分もそこにいる気がして一番面白い。)と日本に居ると体験できない風景を暫し味わってから、国境検問所を兼ねる橋へ向かった。

自転車は徒歩の人と同じく、歩道の検問所を通れる。車道の検問所は渋滞だが、こちらはスイスイ行ける。ドイツ側の係官にスタンプを押してもらおうと、同じ部屋の仕切りの東側にポーランドの係官が座っていた。ポーランドで出会う初めてのポーランド人に「ジェンドブルィ(こんにちは)」と挨拶したのが僕の初めてのポーランド体験となった。橋を渡り終わるとスウオヴィッツという小さな町で、道の真ん中にポーランド国旗がはためき、看板はポーランド語で、道行く車はポーランドのナンバーをつけていて等々、いろいろなモノたちからさつき居た所と国が変わったのが理解できた。

その国境の橋のもとでホテルを探して地図を見ていたらアルコール臭のぷんぷんするオヤジが近寄ってきて、ポーランド語で何か話し掛けてきた。彼は僕が出会ったポーランドの民間人第一号だ。何やら小銭をくれ、と言っているようなので、ロシア語で「ポーランド語は分からない」と言ったら彼は「パニマーユ(ロシア語で:わかった)カネだけ置いていってくれよ」としつこいのでその場を離れた。ロシアでもよく酔っ払いに小銭をねだられたことがあったが、国境を越えてポーランドに入った途端にロシアっぽ



ポーランド最初の街ジェピン
で出会った義足のおじさんと

い人に出会ったので、「さすが！スラヴ人の国だから酔っ払いの多さでもロシアに近くなるのだ！」と勝手に思い込んだ。さらに第一号の遭遇でロシア語が通

じたので、やはりポーランドではロシア語が通じるのだ、とも思い込んでしまった。〈…〉その後向かったワルシャワでは、ここポーランドではやはりロシア語は使わないほうがいいのだということを身にしみて知ることになった。

おさらい(連載第3回・最終回より)

自転車で外国を走ってみたい、国境を越えてみたい、という願いを叶えるために春休みを使ってドイツ・ポーランド国境へやってきた。ベルリンから東へ行くこと約 80 キロ、フランクフルト・オーデルとポーランド領スオヴィッツとの間に架かる国境の橋を超えて、ポーランドの大地を走り始めた。

次にリトアニアのヴィリニユスへ行くためにワルシャワからリトアニア国境のシェストカイという小さな村の駅で特急を待っていた。次の 16 時発の特急が出るまで 2 時間以上もあるので、駅の周りを自転車で走ってみて駅に戻ると、「ヴィリニユス」と表示のある列車がホームから走り出そうとしている。僕の時計はまだ 15 時なのに、駅の大時計を見ると 16 時。ポーランドとリトアニアに時差があるのを知らなかった！この列車を逃すと無人の荒野で野宿することになる。運転手に手を振って止まってもらおうとしたが、首を横に振って無視された。列車は歩く程の速度で走りだしている。ホームの上もおかまいなしにチャリをこいで、客車の開いているドアの所に立っていた女性の車掌さんたちに「乗せて！」と言ったら非常ブレーキをかけて止めてくれた。「早く乗って！」とせかされながら低いホームから何とか自転車を引き上げて乗り込んだ。生まれて初めて走り出した列車を止めてしまった！

6. ヴィリニユス

何とか列車に乗り込んだものの、車掌のオバちゃんに「自転車は袋に入れないと邪魔だよ」などとつけんどんな対応をされるあたりが、ポーランドから、かつてのロシア文化圏の国に入ったのだなあと思った。「命のビザ」で有名なカウナスにも寄ってみたかったが、リトアニアではヴィリニユスにたった一泊だけした。ヴィリニユス駅前は一国の首都とは思えないくらい小ぢんまりとした雰囲気であった。小さい街だが坂が多くて、切り替えギアのない小

な自転車では少し上り坂がきつかった。

『地球の歩き方』に載っている安いユースホテルをやっとのことで探しあてて泊まることにした。ヨーロッパに来て思ったことだが、なぜこちらではユースホテルの部屋は男女相部屋なのだろう？女性客も気にする人がいると思うし、僕が自分で男でも、やっぱり隣のベッドに知らない女の子が寝ていると、やっぱり緊張してしまう。

そんなユースで、同室のイタリア人のお兄ちゃんと、東京外国語大学の女の子と知り合った。イタリア君とは英語で話したが、やはりどちらかという話し慣れたロシア語のほうが話し易いこともあり、会話がぎこちなかった。日本人の彼女はポルトガル語学科だが、卒業旅行なので今回はバルト三国と北欧めぐりだという。かなり久しぶりに日本語を話せて楽しんだのと、うれしくなったせいもあり、この日はヴィリニウス市内を一緒に観光することにした。さらに彼女と一緒にいたお陰で、一人だと貧乏性なので絶対に入らない郷土料理のレストランにも行くことができた。よかったなあ！

さて、次の日はヴィリニウスでも自転車は大活躍した。車道の路面は普通だが、歩道は舗装のコンクリートブロックが壊れてかなり走りづらい。しかも歩道に平気で駐車していてその駐車マナーもかなり悪くて、ドイツとはだいぶ違うなと思った。当初の想像どおり、東へ行くに従って道路の舗装の質、運転マナーなどが悪くなっていくことが実感できた。特に、車道と歩道の境目になる縁石が、タイヤが乗り上げられるように低くなっていないので、歩道に上ろうとする毎に自転車を止めて持ち上げなくてはならないのが不便だった。この縁石の不便さはモスクワと同じだなと思った。

7. 再びワルシャワ〜クラクフ

…自転車とのお別れ

旅の目的のひとつであったアウシュビッツ収容所を見学するために、ヴィリニウスからワルシャワへ戻り、そのまま同じ日にクラクフ行きの列車に乗った。

クラクフ駅に夜着くと、ここでもワルシャワの時と同じようにプライベートルーム(民宿)の客引きの人々が大勢いた。年配の婦人が英語で泊まっていかないかと案内してくれた。「ほかにユースホテルがあるから」とそっちの値段を言うと、同じ 30 ズオチでいいよと言ってくれるので、こちらの民宿に泊まることにした。年齢や背格好が日本で働くぼくの母を思い出させ、この人も生活のために宿泊客を見つけるのにがんばっているんだなと思うと、こっちに泊まってあげようと思った。

クラクフ駅前から町の広場を抜け、その周りを環状に走る道路を渡ったあたりに彼女のアパートがあった。家族は彼女の年老いた両親とで三人暮らしらしい。おばあちゃんに「バルヅミ・ミウオ(はじめまして)」と片言のポーランド語を話したら、おじいちゃんに「スウハイ(ねえちょっと聞いてよ)。※#&”…(ポーランド語を喋ったよ!）」と喜んで話しているのが聞こえた。やはりポーランド語とロシア語は似ているので、少しだけなら分かるようになってきたような気がする。ぼくには使っていない十畳くらいの部屋を貸してくれた。バストイレと台所は家族と共用で、その他にこの三人の居間があった。おじいさんとおばあさんは日中は家にいるようだけど、娘さんは昼間はどこかのオフィスへ働きに出ているようだった。

この五階建てくらいの古風なアパートは、おそらく築百年以上は経っているようだった。貸してもらった家の鍵は、昔話に出てくるような、鍵穴から部屋の中を覗けるようなクラシックなタイプだったので感動した。しかしポーランドではあまり自転車が普及していないせいか、外に駐輪場はないので、自転車を担いで二階の部屋の中に入れておいた。

近くの 24 時間スーパーを教えて貰ったので、早速食料を買いに行き夕食を作った。ポーランドでは食料を買うたびに、物価が安いことに感謝した。この日は冷凍食品のビゴスと黒パン、それに普段は一人でなら飲まないビールを買ってみた。この前泊まったワルシャワのマレクさん家もそうだったが、ポーランドの台所のガスコンロはどれも自動着火でなくて、いちいちマッチで火をつけなくてはならないので、火傷しないようにコツがいる。暖めたビゴスは冷凍食品とは思えないくらい美味かった！

次の日は、クラクフから 70 キロくらい西にあるオシフィエンチム市に日帰りで行ってきた。あの有名なアウシュビッツ収容所を見学するためである。民宿のママさんが、列車で行くよりも乗り合いバス(十人乗りくらいの小さなバン)で行ったほうが安いよと教えてくれたので、この日は自転車を置いていくことにした。なるべく多くの街を自転車で走ってみたかったが、狭いバスなので仕方がない。それでもたった 7 ズオチ(約 210 円)でオシフィエンチム駅前まで行けた。ちょうど



アウシュビッツ収容所にて筆者

た。入口にはヨーロッパ各国のナンバーを付けた観光パスが止まっていた。驚いたことに、日本人の団体観光客もいた。日本からの直行便のないポーランドなのに、意外と多いのかもしれない。

オシフィエンチム市はものすごく小さな町で、駅前にも殆ど店らしきものは無いくらいの淋しい町だった。この日はオシフィエンチム収容所と、そこから2キロくらい離れたビルケナウ収容所を見て来たが、小さな町だからか連絡バスの便も少ないので歩いて移動した。僕が行った日はちょうどイスラエルの高校生くらいの子たちが見学に来ていた。国旗を持つ子、ダビデの星のマークのついたTシャツを着ている子、など民族色にあふれる様相を呈していた。オシフィエンチム収容所とビルケナウ収容所ともにイスラエルの高校生たちが来ていた。修学旅行でここに来ているのかもしれない。印象的だったのが、女子生徒たちがある部屋に入った瞬間泣き出して顔をそむけてしまったことだった。その部屋には収容者たちの(長いのでほとんどが女性のだと思ふのだが)切られた髪の毛の山が展示されていた。ちょうどこの旅行に出る前にイタリア映画「ライフ・イズ・ビューティフル」を観て収容所にも行ってみたいとなったので、映画に出てきた光景とだぶって見えた。この目の前のガス室だった瓦礫は60年くらい前は死体工場だったのだ。最期の瞬間には何を思ったのだろうと思いをはせた。自分が今こうして平和な時代に健康な体で生まれて、好きな国を旅行できることをとても感謝した。

収容所を一日がかりで見学してクラクフの民宿に帰ってふと気付くと、この短い旅が後半にさしかかった。そろそろ自転車をどうするかを考えなくてはならない。日本から持ってきたこの自転車は、本やら土産物を買って増えた荷物と一緒に帰るのはやはり重たすぎる。当初の計画通りなら、どこかで誰かにプレゼントするはずである。でも帰りの飛行機に乗るドイツのフランクフルトまで連れていこうか、と考えた。次に寄るチェコのプラハや、最後のフランクフルトでも自転車がないととても不便だろうと予想できたからだ。しかし、誰にも貰ってもらえなくて、その辺に放っていくことだけはしたくない。そこで思い切って決めた。クラクフでは今回の旅で初めて同じ所で連泊することになっていた。例の民宿にはおじいちゃんとおばあちゃんが住んでいるのだが幸い自転車を持っていな



クラクフでの夕食

い。そんなことを考えながら部屋で夕食を食べた。よし！明日は自転車をあげることにしよう。

次の日はクラクフ市内を一日自転車で探検して歩いた。クラクフの街を適当に走っていると、旧市街から抜け出ていつの間にか社会主義時代に建てられたアパート街へ出た。街の中心部の華やかな商店街とも違った、普通の人々が暮らす何の変哲もない町にあるスーパーで買い物をして、庶民の暮らしが垣間見えた気がした。自転車の利点は小回りのきくことである。市電やバスを待つこともなく、次々と分かれる交差点を思うままにスイスイと好きな方角へ行けることだ。スーパーで買い物していると、5歳くらいの男の子とお父さんが一緒に買い物をしていて、おもちゃ売場の前を通った時に男の子が勝手にミニカーをお父さんの買い物カゴに放り込んだのだが、お父さんが「今日は買わないんだよ」と元の棚に戻す光景がかわいらしいなあと思って見ていたら、苦笑しているそのお父さんと目が合って、思わず二人で微笑んでしまった。言葉は通じないけれど、非言語的コミュニケーションを通して普通の生活をしている普通のポーランドの人と心が通じたような気がしてとても嬉しかった。短期の通りすがりの旅行者にしか過ぎないのに、観光地でない、ありふれた生活の息吹が感じられる地区へ来られたのも自転車があってこそである。自転車よ、ありがとう！お別れの前に、クラクフの旧市街の広場で休んだ時に、ありったけのチリ紙で自転車の埃を落としてやった。

その日の夜は、夜行列車でプラハへ行くことにした。民宿に荷物を取りに帰った時に、おばあちゃんしか居なかったけれど、「自転車をあげます」と言った。この際、意思を伝えるにはロシア語でも仕方ない。何故ここで自転車を置いていくことにしたのかを一生懸命ロシア語で説明した。「もともと盗まれても勿体無くないように、大学のゴミ置き場で拾った自転車を自分で修理して持ってきたこと。持って帰っても日本には自分の自転車があるからあまり使われなくなってまたゴミになってしまい自転車にもかわいそうなこと、等々」を話すと、おばあちゃんは「ドブジェ、ドブジェ」(よし、よし)と繰り返していた。どうやら大体のところ僕の話は伝わったようだ。こうして自転車とはお別れして、夜のクラクフを後にした。

8. プラハ～フランクフルト…終わりに

次に寄ったプラハでは、自転車が無いのはやはり疲れるのを実感した。短い付き合いではあったが、あの青い折り畳み自転車がやはりいいとおしい。プラハでは今回の旅で初めて地下鉄を使った。たまに

は地下鉄もいかなと納得したが。

プラハで一泊した後、夜行バスでフランクフルトに戻った。何故かとても懐かしい感じがした。この旅が始まった僅か10日ほど前に自転車で走り回ったはずなのだが、色々な所をまわって密度の濃い日々を過ごした後なので、とても長い時間が過ぎた気がした。

学生時代の長期休暇はこれで最後だろうと思うので、海外の自転車旅行も最初で最後になるだろ

う。(…)来年春には国家試験に通ったら、研修医生活が数年続くので海外はおろか国内サイクリングもできないだろう。(…)いつか未来に、研修生活が終わって生活が落ち着いたら、オジさんになったぼくは、大きくなったぼくの子供や女房と家族できっとどこかの国を走っているでしょう。短い旅を長い連載にしてしまいましたが、飽きずに読んでくださった読者の皆様、ありがとうございました。

私はヨアンナ・クンツェヴィチと申します。

ポーランドの第二の都市、クラクフの出身です。仕事の経験を増やし、魅力的な人に出会い、そして私にとって全く新しい文化を知るために今年の3月末に札幌にやって来ました。私は若い研究者で、そそっかしい性格で、人生のさまざまな分野で自分の居場所を探し求めている人間です。音楽は私の人生の中にいつもありました。音楽に対する愛を教えてくれたのは父で、彼は家ではよく歌ったりギターを弾いたりしていました。10歳の時、私は自分でもギターを弾くことを覚えました。とはいえ、子供の時に音楽学校に通わなかったことを今でも後悔しています。

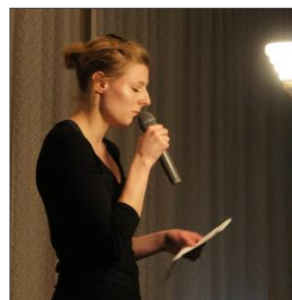
他の道に進み、自分の第2の情熱を育むために、体育学校で学び始めました。専門競技は走り高跳びで、現在でももっとも優秀な選手のひとりに数えられています。私のスポーツにまつわる冒険はおおよそ11年間続きました(ポーランドの全国大会でジュニアとユースの部で2回準優勝しました)。

化学大学の4年生の時に、学問のためにトレーニングを諦めました。高校そして大学で学んでいる間も、音楽に対する情熱から離れたことはなく、いつも世界中の音楽に囲まれていました。音楽に触れ、音楽の才能を伸ばしたいという気持ちが強くなり、クラクフのヤギェウォ大学で博士課程を始まるとすぐに、クラクフのジャズスクールのジャズボーカルのクラスで学び始めました。そこでは素晴らしい人と卓越した音楽に出会いました。人との新たな触れ合いが友情へと発展し、ジャズトリオを結成することになり、クラクフのジャズクラブのコンサートに出演し始めました。ジャズスクールは4年間学んだ後に卒業しましたが、音楽への衝動があまりにも強かったため、カトヴィツェの音楽大学のジャズ学科の正規のコースに通うことになりました。

音楽大学の1年生の時に化学の分野で博士号を取りました。その時に、北海道大学の触媒化学研究センターの大谷教授の実験室でポストドクターのポジションを提案されました。私は新しく始めた学校での仕事と音楽の勉強を一時的に中断しこのチャンスを利用することを決心しました。日本でも自分のこの情熱を育むことができると期待したからです。

札幌での滞在の初めから自分の音楽への陶醉の証を、とりわけポーランド語の曲を機会があればいつでも見せようと披露しようと努めてきました。とりわけ北海道ポーランド文化協会が企画した「午後のポエジア」に出演しました。日本でのこの音楽の冒険は、自分の音楽の創作活動に対するインスピレーションとなるのではと、私は期待しています。

音楽は私にとっては単なる趣味ではありません。音楽は私の内面にずっと離れずに存在しています。それがコンサートであっても、家でも、通りでも、実験室でも、どこでも。それに逆らい、それを抑え込むことはできません。歌いたいという欲求を感じ、そう出来ない時、私は不幸です。しかし求めるだけでは充分ではありません。自分の能力を伸ばすことは時には困難でつらい作業です。でも、自分が伝えたいと思うことに人が耳を傾け、時にはほほ笑み、休息し、気分を変え、内省的になっていると感ずることが出来る時、それは奇跡的な瞬間となります。



“Kolysanka Rosemary”
(ローズマリーの子守唄)
をしっとり歌うヨアンナ。聴衆はひたすらきき惚れた。2011.6.18「午後のポエジア」にて